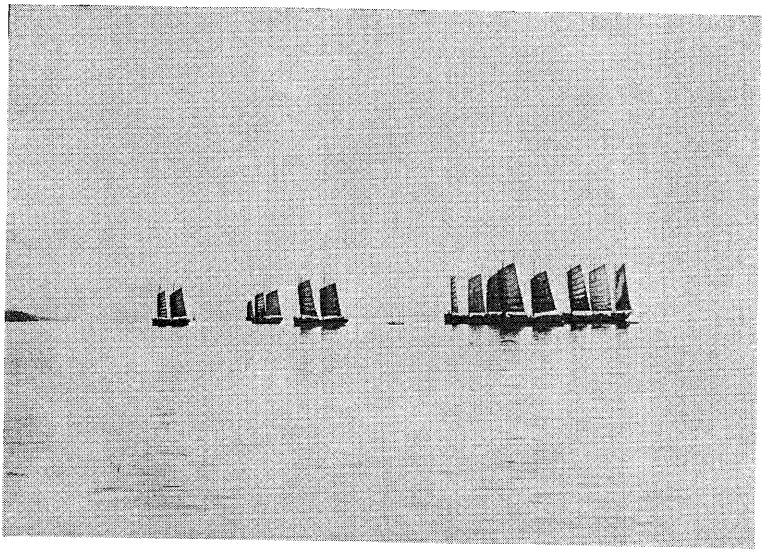
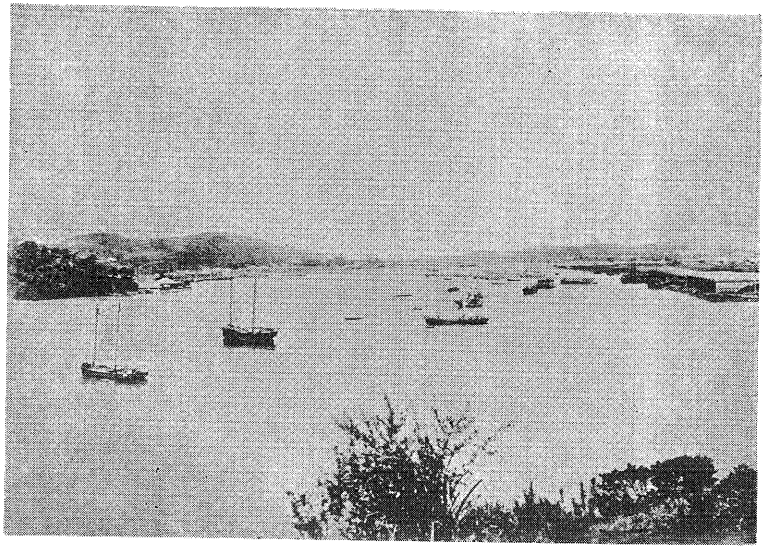


三池炭礦運炭船の運搬風景



口ノ津港風景

口絵　三池炭礦運炭船の運搬風景と口ノ津港風景（明治三八年頃）

三井鉱山株式会社蔵（原寸縦一九六糎横一四二糎）

口ノ津港は島原半島の南端、有明海にある島原海湾の入口に位置している。この港が三池炭の海外直輸出港として認可されたのは、一八七八（明治一一）年のことである。それまで三池炭は、わざわざ長崎まで運ばれ、そこから輸出されていた。この不便を改めるため、三井物産は一八七六（明治九）年九月に三池炭の一手販売権を得るとすぐに三池に近い良港を求め、三角（みすみ）、口ノ津、島原の三候補のなかから口ノ津を選び、政府に同港を直輸出港とするように要請した。こうして直輸港として認可された口ノ津港から、一八七八年四月一五日工部省所有帆船千早丸が海外輸出の第一声をあげた。三井物産では長崎支店の管轄下に口ノ津出張所を設け、肥後屋という船問屋の二階に事務所をおき、五月一日長崎支店員小島祐太郎を所長として赴任させた。五月二二日には長崎税関の支庁も設置された。以来、同港は三池港の完成まで三池炭の海外輸出港として栄えた。

横須浜から口ノ津港までの海上輸送を担ったのが、三池炭礦所有の運炭船と請負の艀船業者の艀船（三池番船と称した）であった。ここに掲載した写真は、横須浜から出発して口ノ津に向う一九〇五（明治三八）年頃の運炭船と当時の口ノ津港の情景である。この頃、運炭船は五六艘、三池番船は二八八艘あった。口ノ津港は泥濘が推積しているため、吃水の深い船舶は外港で停泊し、そこで石炭を積込んだ。この積込業務は一時期を除いて三井物産が直輸港認可以来引受け、同社では口ノ津請負人代表南彦七郎との間に石炭運搬労働請負契約を結び、石炭の積込作業を請負わせた。このような方法は三池炭礦の三井への払下げ以降も変らなかった。

三池炭礦の出炭量が増大するにつれ、運炭船や艀船で横須浜から口ノ津まで輸送する方法では、経費も高くつき輸送力にも限界があった。こうして三池築港が提起され、一九〇二（明治三五）年春に起工が決定され、同年一一月着工の運びとなった。一九〇八（明治四一）年三月には同港が竣工し、四月六日開港場に指定された。近代的積込設備をもつ三池港の完成により口ノ津港は衰退に向った。三池炭の帆船積は口ノ津でおこなわれていたが、一九二三（大正一二）年一月二三日三井物産口ノ津支店の閉鎖とともに三池炭の口ノ津積は全廃された。

（春日）